

ラヴィルマルケとリユージェル

——いわゆる「バルザズ・ブレイス論争」について——

梁 川 英 俊

はじめに

一九〇六年九月、『ル・プチ・ジュルナル』*Le Petit Journal*の編集長は、次のような書き出しで始まる一通の手紙を受け取った。

『ル・プチ・ジュルナル』誌上に掲載された「リユージェルとブルターニュの歌」なる記事を拝見いたしました。この無記名の記事はわざわざ返答する価値のあるものではございませんが、ラヴィルマルケの娘として、この件に関して「ぺてん」という言葉が使われるのを黙って見過ごすわけにはまいりません。批判する権利は誰にでもありますが、「中傷」する権利はないのですから。この下劣なキャンペーンの首謀者たちが、こうした最後の手段に訴えたのは、もし公明正大な批判をしようとすれば、いくつかの要因を考慮に入れなければならないということ、重々承知しているからなのです。(……)

ラヴィルマルケとリユージェル

ラヴィルマルケは幾つかの誤りを犯しました。彼は一八一五年に生まれたのです。―彼は後継者たちの誰よりも大きな成功に恵まれました。彼は世界中にブルターニユを知らせました。信仰心に篤く、詩歌に優れたブルターニユを。そして、けちな嫉妬心から来るいかなる攻撃にも、彼は沈黙をもつて答えました⁽¹⁾。

差出人の名は、エルサール・ド・ラヴィルマルケ・ボワザンジェ *Hersart de La Villemarqué-Boisanger*。自らそう名乗るように、『バルザズ・ブレイス』 *Barzaz-Breiz* の著者テオドル・エルサール・ド・ラヴィルマルケ *Théodore Hersart de La Villemarqué* の娘だった。彼女は無記名で侮辱的な言葉を掲載した以上、その償いをする義務があるはずだとして、『ル・プチ・ジュルナル』に自分の手紙の全文を掲載するよう要求していた。

同誌はその要求に従って手紙の一部を掲載したが、おそらくはあまりに論争的な調子のためだろう、ここで引用した部分については掲載しなかった。それを公にしたのは、今世紀初頭のブルターニユを代表する作家、シャルル・ルゴフィック *Charles Le Goffic* だった。彼は一九二二年に出版された『ブルターニユのこころ 第二集』 *L'âme bretonne, deuxième série* のなかの「バルザズ・ブレイスの問題」 *La question du Barzaz-Breiz* と題された一文でこの手紙の一部を引用し、「古い論争にまた火がつけられようとしている⁽²⁾」と語った。彼はこう言っていた。

かくて、ラヴィルマルケによって生まれ故郷である州の栄光のために打ち建てられた壮麗な建造物のうち、いまはもうただひとつの石として残ってはいない。無残な崩壊！ 文学的名声のなんと虚しくはかないことか！⁽³⁾

ブルターニユはコルヌアイユ地方カンペルレ出身のラヴィルマルケ子爵が、故郷ブルターニユの民衆歌を集めて一八三九

年に若干二十四歳で発表した『バルザズ・ブレイス』は、フランス最初の民衆歌集として、フォリエルやオーギュスタン・テイエリをはじめとする学界の重鎮からも称賛され、大変な評判となった。のみならず、それはまた英語やドイツ語やイタリア語にも翻訳され、文字通り全ヨーロッパ的な評価を獲得ししたのである⁽⁴⁾。故郷ブルターニユの知識人たちも、カエサルのカリア征服以来失われてしまったこの地方の文学的栄光を復興するものとして、この歌集の出版を大きな喜びをもって迎えた。

それから七十有余年――この間にいったい何があつたのだろうか。

この歌集に関する後世の評価に決定的な影響を及ぼすことになったのは、十九世紀後半、民俗学者フランソワ・マリールューゼル François-Marie Luzel を中心とするグループによって展開されたひとつの論争だった。私たちは、以下、ルゴフィックの言うこの「古い論争」、すなわち俗に「バルザズ・ブレイス論争」と呼ばれる論争に焦点を当てながら、その経緯を辿っていく。それは、たんにラヴィルマルケとリュールという二人の学者の意見や立場の相違のみならず、その背景にある十九世紀ブルターニユの政治的・歴史的・民俗誌的な諸状況を確認する作業ともなるに違いない。

I 『バルザズ・ブレイス』の登場

『バルザズ・ブレイス』の成立

『バルザズ・ブレイス』(フランス語題名『ブルターニユの民衆歌』 *Chants populaires de la Bretagne*) は一八三九年八月末、シャルパンティエ Charpentier 書店から二巻本として出版された。

著者のラヴィルマルケがバス・ブルターニユ地方で収集・翻訳した民衆歌の集成と銘打たれたこの歌集に収められた歌

は、全部で五十三篇。ブルターニュにおける伝統的な歌の区分に従って、全体は第一部「歴史的な歌」Gwerzennou, chants historiques、第二部「愛の歌」Sounennou, chants d'amour、第三部「宗教歌」Kanaouennou, chants religieux の三部に分かれていた。各部に充てられた歌の数は、それぞれ順に三十一篇、十七篇、五篇。この数字からも窺えるように、歌集の比重は圧倒的に「歴史的な歌」に置かれ、分量的に見てもそれは第一巻のすべて、第二巻の半分以上にも及んだ。収録された歌のうち八つの歌には散文訳のほか韻文訳が掲載され、第二巻の巻末には幾つかの歌のメロディーを転写した楽譜も掲載されていた。

第一巻の冒頭には、テキストの紹介に先んじて、まず著者の手になる短い「前文」Préambule が、続けて長大な「序文」Introduction が掲げられていた。「前文」にはこうあった。

フランスの王族や貴族や聖職者はその歴史をもっている。「第三身分」もまた、オーギュスタン・ティエリの指導の下で進められている仕事のおかげで、やがて彼らの歴史をもつようになるだろう。すべての人が公平に扱われることになるとすれば、忘れられているのは民衆だけということになる。この忘却はどうして生じたのか。それはたぶん無知からである。民衆の歴史に関する材料を集めるための労力が払われなかったのは、そんなものがあると誰も思ってもみなかったからだ。実際、それは「特許台帳」にも「年代記」にも記録されてはいない。それは書かれていないのだ。しかしそれは民衆の伝統的な歌のなかに記録されており、ただそれを集めればよかったのである。(……)もしこの歌集が遺漏のないものならば、それはそのタイトル通りのものに、まさに一個のバルザズ・ブレイスに、すなわち「歌によるブルターニュの歴史」になっただろう⁽⁵⁾。

著者の意図は明白だった。それはブルターニュの民衆歌を集成することによって、この地方の民衆にそれまでけつして書かれることのなかった歴史を与えることだったのである。「歴史的な歌」が収録された歌の過半を占めたのもまさにそれゆえだった。しかも著者によれば、こうした民衆歌集はすでにヨーロッパの大半の国がもっていた。フランスはこの分野では明らかに遅れをとっていたのである。その意味で、この歌集はそうした欠落を埋めるための最初の試みでもあった。しかも著者はこうした仕事をする上で大変に恵まれた環境にいた。

この歌集のアイデアを思いついた功績は私のみには帰せられるものではない。それは私が生まれる何年も前からすでに始まっていたのである。ことの次第はこうである。

私の母は、いまから三十年ばかり前、貧しい乞食の女歌手に治療を施してやったことがある。「感謝のしるしに何か御礼を」と繰り返す彼女の姿に心を動かされ、「それでは歌を」と答えた母は、ブルターニュの歌の美しさにたいそう感銘を受けた。以来、彼女はしばしば心に沁みるこの貧者の貢ぎ物を所望し、またそれを受け取りもしたのである。

つまり、この歌集はすでに著者の母によって始められていた歌のコレクションを土台にして、その上に著者自身による収集の成果を重ねたものだったのである。しかし、だからといって著者の貢献度が低かったわけではない。実際、ラヴィルマルケは、自ら数年をかけてブルターニュを踏査し、階層・性別・年齢を問わずさまざまな人々の歌に耳を傾けてきたことを語り、収集のために費やされた努力を強調することを忘れなかった。こうして集められた、そのまま出版すれば二十巻は下らないであろう豊富な材料のなかから厳選されたものが、ここに収められた五十三篇の歌なのであった。

もつとも、ラヴィルマルケは収集された歌をそのまま活字にしたわけではなかった。では、彼はどのようにしてテキスト

トをつくったのか。その作業について、彼はこんなふうに言っていた。

可能なかぎり完全で、純粋なテキストになるよう、私はそれをしばしば十五回や二十回もいろんな人に繰り返し返してもらった。そして私はいつももつとも詳細なヴァージョンを選んだ。といのも、オリジナルの民衆歌が貧弱なものであったとは思えないからだ。逆に、私はそれが原則として豊かで装飾の多いものであったと考えている。それが痩せ細ったのはただ時間のせいなのだ。(……) 同一の歌のヴァージョンが次々と明らかになる。編者が手を入れねばならぬようなものは何もなく、彼はただ細心の注意を払ってもつとも流布したヴァージョンに従っていかねばならない。彼に許されているのは、ただそのヴァージョンにある風変わりな表現やあまり詩的でない部分を、ほかのヴァージョンにある対応する節や詩句や語に置き換えることだけである。これがウォルター・スコットの方法だったのであり、私はそれに従ったのだ(?)。

ここに明らかに述べられているように、ラヴィルマルケにとってブルターニュに残っていたさまざまな歌とは、すべて最初は完全な形であったオリジナルの歌が、伝播の過程で変質を蒙ったものにほかならなかった。つまり彼にとって歌集の編集とは、同一の歌から出たと思われるさまざまな歌のヴァージョンを検討することによって、オリジナルの歌を復元することだったのである。その意味で真に重要だったのは、収集よりもむしろその後の復元作業の方だと言ってもよかった。しかも、著者はその成果にたいして絶対の自信をもっていたのである。彼はこう言っている。「私はここにこれらの詩を公にするが、そこにはその真正さの動かぬ徴があると確信している。必要とあらばほかの証拠を示すこともできようし、歌を歌ってくれた歌い手の名前を明らかにすることもできるだろう。しかし、私はその歌がいまだに歌われているブ

ルターニユの諸地方に住む名士たちの名を挙げるにとどめたのである。」。

さて、「前文」の最後を飾っていたのは、錚々たる人々に捧げられた謝辞であった。それは『バルザズ・ブレイス』の審査の労を取ってくれた「フランス語フランス文学歴史委員会」の諸氏、なかでも歌集に賛辞を惜しまなかったフォリエル、委員長を務めた公教育相ヴィルマンに始まり、郷土の偉人シャトーブリアンを称揚しつつ、歴史家オーギュスタン・ティエリ、プロイセンの元大臣ブンゼン、そしてかのグリム兄弟へと続いていたのである。若干二十四歳の青年が誇るべき人脈としては、まずは申し分のないものであった。

「序文」について

続く「序文」は十の部分に分かれ、ローマ侵入以前のガリアの昔にまで遡りつつ、ブルターニユにおける歌の歴史を延々七十六ページもの長さになたって展開していた。

著者はまず「アルモリカにはまだケルトやガリアの伝統が残っている」とする歴史家ジャン・ジャック・アンペール Jean-Jacques Ampère の『フランス文学史』 *Histoire littéraire de la France* の一節を引きながら、ブルターニユの古代についてその博識を披露していた。いわく、この地方は山海に囲まれたその地理的条件のため、外敵の侵入を受けず、長く古のバルドの伝統を保存した。ガリアがローマ化された後も、この地方はその影響を蒙らなかつた。のみならずその伝統は、タリエシンを始めとするブリテン島から移住してきた島のバルドたちの影響を受け、五、六世紀にはまた新たな形で花開きもしたのである、云々。

もつとも、ブルターニユでは当時からこうしたバルドたちの歌とは別に、より素材で世俗的なもうひとつの歌の世界があった。すなわち、民衆歌である。それは、タリエシンの激しい批判にもかかわらず、やがてバルドの伝統を駆逐してブ

ルターニユの全土を覆うに至る。技巧を凝らした厳格な芸術に、素朴な民衆の自然な表現が取って代わるのである。実際、こうした民衆歌は、作者が見聞きしたり感じたことしか語らなかつた。そこには創作的な要素は一切なく、あつたこと、起きた出来事がすべてだつた。それゆえこうした歌のなかには、「昨日」や「一年前」といった言葉のみならず、ときに具体的な年代の指定までがあつた。一方、このことはまた、歌の制作年代にまつわる興味深い事実を知らせてもいた。ラヴィルマルケはこう言っている。

この原則から、フォリエルやアンペールやリユースによつても認められ、また以下に述べるすべてのことの基礎となるあの重要な真理が導きだされる。すなわち、民衆歌は一般にそれが伝える出来事や感情や宗教的伝統ないしは信条と同時代のものであり、それゆえその作品がいつ成立したかを知るためには、そこで言及されている出来事や人物、または表現されている感情、あるいは宗教的な見解や伝統がどの時代に属するものなのかを調べなければならぬのだ⁽⁹⁾。

つまり、現実をありのままに伝えるこうした民衆歌は、まさにそれゆえに過去の出来事をまるごと後世に伝えるものでもあつたのである。実際、十三世紀の女流詩人マリー・ド・フランスはこう語っていた。「ブルトン人には、彼らの身に起こつた出来事を忘れないようにレーレにしておく習慣があつた⁽¹⁰⁾」、と。つまりブルターニユの民衆歌の作り手とは、またこの地方の年代記作者でもあつたのである。ラヴィルマルケがこうした歌を集めることで「ブルターニユの民衆史」が可能になると考えた理由も、まさにそこにあつた。

では、こうした歌の作者とはどういう人たちだつたのか。もちろん、この地方で歌をつくつた人は数多くいた。しかし、なかでももっとも才能に恵まれていたのは、粉屋、仕立屋、屑物屋、乞食、そして吟遊詩人だつた。とくに乞食はほかの

地方とは比較にならぬほど人々から厚遇され、施された善意に歌で応えてもいたのである。また、ブルトン語で「バルス」*bars*、すなわちバルドと呼ばれた吟遊詩人たちは、この種の歌手のなかでもっとも評価されており、古のバルドたちの栄光を幾分かとどめていると言われもした。彼らは記憶に値する行為や出来事を称揚し、貴賤の別なくあらゆる人を非難と称賛の的にした。その存在はとりわけ祝い事には欠かせず、なかでも結婚式では司祭もかすむほどの役割を演じていたのである。さらに仕立屋は、ブルターニユの諺に「その耳は長く、その目は夜昼問わず開いており、その舌は鋭い」と謳われ、辛辣で人を嘲弄するような歌を得意としていた。粉屋や屑物屋も同様だった。彼らの歌の領分は大半が家庭内の色恋沙汰であったが、こと恋愛の情熱を歌うとなると「クロエール」*Kloer*と呼ばれる聖職者の卵の出番だった。彼らはほとんどが二十歳前の青年で、その歌で既婚女性を誘惑し、若い娘を墮落させると言われたが、聖職者になると一転して過去を忘れ、敬虔な宗教歌によってその情熱の対象を天へと向けるのだった。

『バルズ・ブレイス』に収められていたのは、こうした人々がさまざまな時代につくり、歌い継いできた歌であった。しかも先に見たように、著者のラヴィルマルケは、そうした歌の内容を仔細に検討すれば、必ずその制作時期を割り出すことができるという確信をもっていたのである。たしかにそれは伝播の過程でやむを得ぬ変更を蒙りはした。しかしその変更は歌の根本的な内容にまで影響を及ぼすようなものではない。というよりも、むしろ民衆の歌にたいする敬意はそれに手を加えることを妨げるほどのものなのだ、と著者は言う。

実際、民衆が彼らの歌を聴くときには、宗教的なまでに精神を集中させる。それを見れば、ブルターニユの歌手は敬意を払われるに相応しい存在なのだということが理解できる。その役割はただ人々を楽しませ、喜ばせることだけではない。彼らは言葉の守護者であるばかりか、民衆の年代記や良き風俗や社会的美德の守護者でもあり、(……)ブルター

ニュの文明のもつとも積極的な担い手でもあるのである。彼らはあらゆる時代においてこの使命を理解し遂行した。(……) 彼らは祖国の運命を、その不幸と希望を歌った。(……) かくて、ブルターニュの民衆詩人の大義は、一度としてその国の大義と別なることはなかったのである⁽¹¹⁾。

こうして著者が描く民衆詩人の肖像は、次第に愛国的な表情を帯びていった。ブルターニュの民衆は彼らの周りにことあるごとに集まり、その歌声に耳を傾けたのである。とりわけこの地方の伝統的なキリスト教の祭りであるパルドン祭のときはそうだった。

「序文」の最後を飾るのは、少なくとも三日は続くというその祭の壮麗な描写である。前日から掃き清められ、飾り付けられる教会。その傍らで、夜になると始まるダンス。焚き火の周りを祈りながら廻る人々。司祭のために焼かれる肉。翌日の晩課が終わると始まる、壮麗きわまりない宗教行列。野原でテントを立てて夜を過ごす巡礼者たち、等々。この祭のためにブルターニュの方々から駆けつけた歌手たちは、そこで聖人伝説や賛美歌、あるいは出来たての甘く切ない恋愛歌を歌い、ときに劇を演じて見せましたのである。つまり彼らの歌は、こうした土着的な民衆の風俗と切り離せないものだったのである。

「アーサー王は死んではいない」。時代の変化に抗していまも生き続けるこの文明を前に、著者は中世のウェールズとブルターニュとともに歌われたという、この古いリフレインを引用して「序文」を結んでいた。

歌の内容について

さて、では個々の歌の紹介は具体的にどのようなようになされていたのだろうか。まずはこの歌集の構成から見よう。

『バルザズ・ブレイス』に収められた歌は、すべて対訳形式で、左ページにブルトン語の「原文」が、右ページにフランス語の「翻訳」が掲載されていた。さらに、それぞれの歌には最初に「論拠」argumentが、最後には詳細な「註と説明」notes et éclaircissementsが付されていた。もともと、この構成はラヴィルマルケの独創ではなかった。というのも、それは一八二四年に出版されて評判になったフォリエルの『現代ギリシャの民衆歌』*Chants populaires de la Grèce moderne*の形式をそのまま踏襲したものだからである。ちなみに両者は八ツ折版の二巻本という体裁の点でも共通していた。いずれにせよ、この歌集は、まず各々の歌が「論拠」によってその歴史的な文脈を規定され、最後に「註」によってその解釈の正当性を検証されるという形で構成されていたのである。具体例を見よう。

たとえば、この歌集の劈頭を飾る『グエンフランの予言』*Prediction de Gwenc'hlan*である。このグエンフランなる人物については、実は「序文」でもすでにかなりのページ数が割かれていた⁽¹²⁾。それによると、この人は五、六世紀にブルターニュで活躍したバルドで、その名を民間伝承のうちに残す唯一の人であるという。実際、その存在についてはネンニウスなどの歴史家も言及しており、また『予言』*Diouganou*と題された彼の詩の写本がランデヴェエネックの僧院に保管されているということが、ロストルナンヤルペルティエによって夙に指摘されてもいた。しかし、残念ながらこの写本はその後行方不明になっていた。

そうしたなかで、写本を発見せずとも歌の内容を知ることができると主張する者が現われる。ブルターニュ有数の歌の収集家ジャン・マリー・ド・ペングエルン *Jean-Marie de Penquern* である。ラヴィルマルケはこう言っている。「ペングエルン氏は、グエンフランの詩は民衆によって口伝で代々伝えられてきたはずだと考え、(……) ついにそれと断言できる歌を探し当てたのである。われわれもまた同じように探索に努め、その結果について読者に判断を仰ぐ。本歌集の最初の歌はこのバルドの手になるものと言われ、農民たちに『グエンフランの予言』と呼ばれている⁽¹³⁾」。

以上のような「序文」における説明を前提として、さらに著者は「論拠」でこのバルドに関して農民の間に伝わるひとつの伝承を紹介し、次のように語っていた。「グエンフランは彼の生き方を快く思わないひとりの異国の皇子によって長い間追われていた。この皇子は彼を捕えると目玉を剝り抜き、独房に放り込んで殺したのである。(……) 真偽の程はともかく、この伝承はグエンフランが死の数日前に獄中でつくったとされる以下の歌の内容とみごとに一致するのである⁽¹⁴⁾」。

肝心のテキストを見よう。

太陽が沈み、潮が満ちるとき、私は戸口で歌う。

若いときに私は歌い、老いたいまもなお歌う。

私は夜に歌い昼に歌い、にもかかわらず悲しんでいる。

私があなだれて歩くのも、悲しいのも、理由のないことではない。

怖いからではない。私は殺されるのが怖くはない。

怖いからではない。私はもう十分に生きた。

私は探せば見つからず、探さなければ見つかるのだ。

何が起きててもかまわない。起きることが起きるのだから。

終の安息を得るまで、人は皆三度死ななければならない⁽¹⁵⁾。

(……)

続く「註」は、冒頭から「この作品は古のウェールズのバルドたちによる歌とはつきりとした共通性をもっている⁽¹⁶⁾」

という著者の確言によつて始まつていた。その根拠は以下のようなものであつた。いわく、ゲエンフランはタリエシンのように、ドルイド神学にある「三度の転生」と輪廻の教義を信じている。ヒヤワツヘンのように、老いを嘆き悲しむ運命論者である。牢獄で辞世の歌を詠うこのアルモリカのバルドの話は、囚われの身で詩をつくつたアナイリンの話との類似性を感じさせる、等々。ウェールズの具体的なバルドの名前を挙げながら、古文書からの引用も交えつつ論を進める著者の博識は、たしかにこの歌の作者が紛れもなく古のアルモリカのバルドであることを読者に説得するに十分なものであつた。いずれにせよ、著者がなによりも重視していたのは、収録された歌の歴史性の確認とその成立時期の確定だつたのである。

ほかの歌も見よう。たとえば、妖精が子供と醜い小人を取り替えるという伝説を歌つた『偽の子供』*L'Enfant Suppose* は、島のブルトン人とアルモリカのブルトン人が分かれる八世紀以前に成立したものとされ、その証拠として十二世紀前半にジェフリー・オブ・モンマスが著した『メルラン伝』にこの歌の一節が引用されていることが確認されていた。『エリアンのペスト』*La Peste d'Elliant* は、六世紀にアルモリカを襲つたペストを歌つたものとされ、その成立もまたこの時代に遡ると主張された。さらに『預言者メルラン』*Merlin-Devin* では、テキストの内容が仔細に検討され、それがキリスト教とドルイド教が覇権争いを続ける古代につくられたという推測が述べられていた。あるいは『うぐいす』*Le Rossignol* の「論拠」では、「この美しいバラードはマリー・ド・フランスに知られていた以上、ためらいなく十三世紀以前に成立したものだと思ふことができる⁽¹⁷⁾」と言われ、比較のためにわざわざ彼女の詩が「註」で四ページにわたつて引用された。こうして、ドルイドの古代から「ふくろう党」の反乱に至るまでのブルターニュの歴史が、紛れもなくその時代に成立し、数世紀の長きにわたつて歌い継がれてきた民衆歌によつて、読者の眼前に展開されていくのだった。

もつとも、そこに収められた歌は、著者による説明がなければほとんど理解し難いようなものも少なくなかつた。のみ

ならず、そこで披瀝される知識の大半は読者にとって縁遠いものであり、それゆえ著者の解釈に疑念を差し挟むことはほとんど不可能に近かった。実際、出版後の『バルザズ・ブレイス』に寄せられた批評には、称賛と好意以外のものはなかったのである。

出版後の評価

ここでその評価の一端を紹介しよう。たとえば、レンヌの『ロクシリエール・ブルトン』*L'Auxiliaire breton* は一八三九年十月二日付で次のように言っていた。

ド・ラヴィルマルケ氏が反論不可能な証拠を手に、われわれの詩的古代の聖なる大義を擁護してくれたことを神に感謝しよう。彼はわれわれが今日歌っている歌が千年以上も前にも歌われていたことを、疑いのない明々白々な事実として証明してくれたのだ¹⁸。

「反論不可能な証拠」といい「疑いのない明々白々な事実」といい、いずれもこの歌集がもつ強い説得力を証明するものだった。同じことはまた、同年十一月の『ヌーヴェル・ルヴェ・ド・ブルターニュ』*Nouvelle Revue de Bretagne* における、次のような評言に関しても言えた。

ブルターニュの古い文学が話題になると、当のブルターニュでさえ、幾人かは憐れみの笑いを浮かべる。(……) 神のご加護によって、こうした偏見は消えはじめています。ラヴィルマルケ氏によって出版された作品と、近く出版される

それに劣らず注目すべき作品を見れば、どんなに疑りぶかい人でも、ブルターニュがギリシャやドイツなどあらゆる国民の詩歌に比肩するどころか、それを凌ぎさえする詩歌をもっていたことを納得するだろう⁽¹⁹⁾。

『バルザズ・ブレイス』におけるラヴィルマルケの説明は、文字通り「どんなに疑りぶかい人」でも「納得する」ものとして受け取られたのである。実際、出版後に新聞や雑誌に掲載された批評のなかで、その内容に疑念を表明したものは皆無だった。

もっとも、少しでもブルターニュの事情に通じている人間となると、ことはそれほど単純ではなかった。実際、ラヴィルマルケの友人で、のちにブルターニュを代表する歴史家として知られることになるオーレリアン・ド・クルソン Aurélien de Courson は、一八三九年十一月一日付の手紙で、著者にたいして「序文」には幾つか批判すべき点があると告げ、次のように書いていた。

この種のことについて他の誰よりも知っているわれらブルトン人の意見として言いますが、各々の詩に充てられた年代には、明らかな誇張があります⁽²⁰⁾。

歌の年代に関する疑問とは、まさにこの歌集の生命線に触れる問題であり、下手をするとその屋台骨を揺るがしかねないものであった。しかし、クルソンはこの問題にそれ以上深入りすることはなかった。彼にとって『バルザズ・ブレイス』が出版される意義は、そうした疑問とは比較にならぬほど大きなものだったのである。もっとも、同じ疑問を抱いたのは、実は彼一人だけではなかった。が、この時点でそれが大きな声になることはけっしてなかったのである⁽²¹⁾。

さて、この歌集はまたパリにおいても好意的に迎えられた。たとえば、十月十五日付の『ガゼット・ド・ラ・フランス』は次のように言っていた。

ともあれ、われわれに自らの興味深い故郷をかくも見事に知らせてくれた、この若く勤勉な文学者に敬意を表そう。彼は趣味のよさと真の愛郷心を示してくれたのだ⁽²²⁾。打ち続く革命によって鍛えられ、中央集権化のせいで中道主義という生きる屍に結びつけられた、あの首都の首かせを逃れようとして地方が払う努力を見るにつけ、今日では以前にも増して、われわれはラヴィルマルケとともに（……）こう繰り返すことができるのだ。「いや、アーサー王は死んではない」と⁽²³⁾。

この歌集のナショナルな性格は、県制の施行による州の消滅と、中央集権体制の強化という七月革命後の時代的雰囲気の中なかで、首都においても明らかに好ましいものとして受け取られたのである。いや、国内ばかりではない。その評判はまたドイツやオーストリアやイギリスなど、国外においても高まっていた。

たしかに『バルザズ・ブレイス』の評判は上々だった。しかし、気懸かりな点もあった。というのも、ブルターニュでこの歌集に好意的な評価を寄せたのは、すべて非ブルトン語圏のオート・ブルターニュ地方のメディアのみで、肝心のバス・ブルターニュ地方からの反響は一向に聞こえてこなかったからである。別に黙殺されたというわけではない。ただ、少なくともそれが郷土の誇りとして評価されることは、けっしてなかったのである⁽²⁴⁾。

II ブルトン語純化運動の展開

『ブルトン語の未来』

さて、すでに見たように、『バルザズ・ブレイス』の目的は歌によるブルターニュの民衆史の構成にあった。しかしこの歌集にはまた、フランス語の訳文のみを読む者ならばけっして気づかない、いまひとつの目的があった。それは、前年に亡くなったブルトン語学者、ジャン・フランソワ・マリー・ルゴニーデック Jean-François-Marie Le Gonidec の業績を顕揚することである。ラヴィルマルケが師と仰いだこの言語学者が考案した、ブルトン語の合理的かつ革新的な綴り字法に基づいて規範的なブルトン語をつくること。これがラヴィルマルケが『バルザズ・ブレイス』のブルトン語原文で試みたことだったのである。その点でこの歌集は、その後彼が活発に取り組むことになるブルトン語純化運動の最初の試みでもあるとも言えた。

そのための、いわばマニフェストとしてラヴィルマルケが一八四二年に発表したのが、『ブルトン語の未来』*L'Avenir de la langue bretonne* だった。以下、しばらくこの論考を追おう。

冒頭、ラヴィルマルケはこう言っていた。

フランスと婚約させられたブルターニュがその政治的権利を放棄した日、そのナシヨナリテは大きく揺らいだ。にもかかわらず、ブルターニュがフランスに完全に屈服したはずもなかった。一個の力がまだ残っていた。ブルターニュの習俗と伝統を外国の影響から守り、そのもつとも高貴な部分を救ったその力とは、ブルトン語であった⁽²⁵⁾。

実際、ブルトン語はこの地方をさまざまな災厄から守った。たとえば、併合後、フランスを二つの災厄が襲った。カルヴィン主義とヴォルテール主義である。しかしブルターニュはフランスのなかにありながらこの災厄を免れた。なぜか。それは彼らの言語を理解しなかったからである。つまりその災厄の防波堤となったのは、紛れもなくブルトン語だったのである。いいかえれば、この固有の言語のおかげで、ブルターニュは自らの政治的独立を失いつつも、そのナシヨナリテを維持し得たのである。

さらに、著者はブルトン語の歴史を振り返りつつ、その「高貴さ」を強調していた。いわく、ヨーロッパでブルトン語ほど古い文学的遺産をもつ言語はほかになく、フランス語もその形成にあたってはブルトン語の恩恵を受けた。実際、ヨーロッパ中に伝播したあの「円卓物語」も、もともとはブルトン語で語られたものである、云々。しかし、その高貴なる言語もいまは危機に晒されている。

人が中央集権制と呼ぶ一般的な平準化システムの代表者たちから見れば、この言語はなんの価値もない。(……)彼らはブルターニュの習俗、その古い慣習、その社会状態の名残、とりわけその古い言語を破壊して、フランス語とフランス的な考え方を押しつけようとしている。(……)しかし中央集権制の信奉者たちはしきりに知識と文明の進歩に訴え、ブルトン人を文明化するには、その言語を廃絶してフランスの他の地方と同じくする以外にないと主張する。(……)だが、文明化するのは支配するためである⁽²⁶⁾。

「しかし」と著者は言う。「われわれの敵の共犯者は、皆が同列に並んで、同じ隊長の命令に従っているわけではない⁽²⁷⁾」。いいかえれば、ブルトン語の敵はなにもフランスのみではなく、また身内のなかにもいるのである。著者はそうした「共

「犯者」として三種類の人々を挙げた。まず批判の対象となったのは、ブルトン語を豊かにすると称して、語尾を変えただけのフランス語を大量に混ぜる人々、すなわち都市の住人や聖職者たちだった。こうした行為は一見些細なものに思えるかもしれない。が、船の横腹から沁み入るわずかな水も、溜まれば船を覆すこともある。それゆえ、著者はとりわけ聖職者たちにたいして、民衆に与える影響力が大きい分なおさらその言葉には気をつけなければならぬ、と注意を促すのである⁽²⁸⁾。

続けて、彼は学校教師たちを槍玉に挙げた。その舌鋒はここではさらに鋭かった。

フランスでは、教師は多少なりともグロテスクだが無害な存在にすぎない。ブルターニュではグロテスクかつ醜悪な存在だ。有能なものであれば、親が子供を慎重に遠ざけなければいけないような、危険な存在にすらなりうるだろう。(……) 教師はフランス語で質問し、子供たちがブルトン語で答えると厳しく叱りつけるのだ⁽²⁹⁾。

国家による初等教育の整備を初めて謳った「ギゾー法」の成立からほぼ十年を経たこの時代、フランス語を教える学校教師の存在は、たしかにブルトン語の存続にとって脅威となりかねないものであった⁽³⁰⁾。とはいえ、当時のブルターニュでは彼らはまだ少数派であり、その影響はとりたてて危惧するほどではなかった。実際、ラヴィルマルケ自身もこう言っていた。「神のご加護により、教師たちの言語はブルターニュの農民のうちにはそれほど浸透していない⁽³¹⁾」。

もつとも、さらに厄介な敵がいた。ブルトン語で大衆向けの印刷物を発行する印刷業者たちである。しかし常識的に考えれば、そうした印刷業者は本来もつともブルトン語の普及に貢献しているはずの人たちであった。その彼らがなぜブルトン語の敵となるのか。問題は彼らが印刷するブルトン語の性質にあった。

要するに、それは著しくフランス語化され、それゆえラヴィルマルケの目には醜悪なものとしか映らなかつたのである。そればかりか彼はまた、ルゴニーデックの辞書のような良書が陽の目を見ず、慣用と異なるアカデミックなブルトン語だと思われてしまうのは、これら印刷業者のブルトン語の方が本物のブルトン語だと誤解されているためだと考えた。だとすれば、重要なのは、民衆に真のブルトン語を知らせることである。そして、ラヴィルマルケが『バルザズ・ブレイス』の出版で自らに課した仕事とは、まさにそのことだったのである。彼はこう言っていた。『バルザズ・ブレイス』のテキストこそは、われわれの田舎で話されているブルトン語の純粹さの正確なバロメーターなのであり、ルゴニーデックにたいする評価が不当なものであつたことを証明しているのである⁽³²⁾』と。

つまり、必要なのは、なによりもまずルゴニーデックの方法の普及によるブルトン語の純化なのである。すなわち、「この言語に失われた豊かさを与え、それを若返らせ、純化すること、あるいは少なくとも、それがいまもお保たれている程度の純粹さをそのまま維持すること⁽³³⁾」。ラヴィルマルケが「ブルトン語の未来」として思い描いていたのは、大略以上のようなことだった。彼は誇らしげにこう書いている。

こうしてブルトン人は、かつてフランスの軍隊の侵攻に抵抗したのと同じ執拗さをもって、フランス語の侵入に抵抗している。(……)ブルトン語は今日なお、ルゴニーデックの仕事のおかげで、かつてなかつたほどの入念さで磨かれている。ブリズー氏はこう言った。「十九世紀、新たな文明を前にして、ブルトン語はいまローマ侵入以来もつとも純粹な形で書かれている」と⁽³⁴⁾。

最後に、著者はこうしたナシヨナリズムの鼓動が感じられる地方は、いまやブルターニュのみならずフランスの北から

南まで至るところにあると語り、オック語の詩人ジャスマン Jassin の詩句を引用しつつ、こう結んでいた。「幾千年ものときが過ぎ去りてもなお、われわれの歌は鳴り響きやまぬだろう！」⁽³⁵⁾

聖職者たちの反応

ところで、この『ブルトン語の未来』なる論考が最初に公にされたのは、一八九二年、サン・ブリウーのプリュドム書店から刊行された、アンリ神父の『賛美歌集』*Kanouennou Santel* の巻頭においてであった。論中、ラヴィルマルケはこの歌集を評してこう言っていた。「ひとことで言えば、表現にその価値を、文にその正しさを、リズムにその節度を、テキスト全体にその純粹さを、その輝きを、それが元来もっていた斬新さを与え、論理的でナショナルな、フランス語の綴り字法の模倣ではない方法でそれを出版すること。これこそまさに、アンリ神父が賢明この上ない批評家諸氏の賛同をうるようなやり方で成し遂げたことなのである」⁽³⁶⁾。

いうまでもなく、この賛美歌集はルゴニーデックの方法によって編集されていたのである。ところで、その著者ジャン・ギヨーム・アンリ神父 *abbé Jean-Guillaume Henry* は、カンペルレの救済院の司祭であった。一八三六年来この職にあった神父とラヴィルマルケの出会いがいつのことであったのか、正確にはわからない。おそらくは、ラヴィルマルケが調査を目的として故郷に長期にわたって滞在するようになった一八四〇年頃のことであったろう⁽³⁷⁾。いずれにせよ、アンリ神父はラヴィルマルケを通じてルゴニーデックの改革を知る。年齢的にはラヴィルマルケの方が若かったが、ルゴニーデックに直接師事したその経験と『バルザズ・ブレイス』の成功は歳の差を問題にしなかった。こうして、アンリ神父はラヴィルマルケにとって生涯にわたる重要な協力者となる。そして、この二人が最初に協力して取り組んだ仕事が、ルゴニーデックの方法の普及、すなわちブルトン語純化運動だったのである。

最初にこの運動のターゲットになったのは、聖職者たちであった。なぜか。すでに見たように、ブルトン語はカルヴィン主義とヴォルテール主義、すなわちプロテスタントと啓蒙主義の侵入にたいする強固な防波堤となっていた。つまり、純粋なブルトン語の擁護は、またカトリシズムの擁護と切り離せないものだったのである。十九世紀のブルターニュで頻繁に口にされた「信仰とブルトン語とは兄弟姉妹である」という言葉に簡潔に表現されるこの関係は、自由思想が蔓延し、プロテスタントが政治の中枢を握る七月王政下にあつては、とりわけ強化されねばならないものだったのである。

さて、この運動のいわば機関誌となつたのが、一八四二年にサン・ブリューで創刊された『ルヴュ・ド・ラルモリック』*Revue de l'Armorique* であつた。若干三十四歳のオーレリアン・ド・クルソンが、義父のケルガラデック子爵 *vicomte Le Jumeau de Kergaradec* の協力を得て創刊したこの雑誌は、カトリシズムと信仰にもとづく社会の擁護を目標として掲げていた。

一八四二年九月十五日、同誌はすでに発表されていた『ブルトン語の未来』*L'Avenir de la langue bretonne* を転載すると、一八四四年九月二〇日、『ルヴュ・ド・ラルモリック・エ・ド・ルエスト』*Revue de l'Armorique et de l'Ouest* と改称して隔月刊となつた最初の号で、『信心会の手紙』*Annales de la Propagation de la Foi* のブルトン語版、すなわち *Lizerion Breuriez ar Feiz* の刊行を告げ、以下のようなカンペール司教グラヴラン師 *Mgr Graveran* の賛同の言葉を引いていた。

私たちは『信心会の手紙』の抜粋のブルトン語による出版に大きな喜びを感じております。(……)ド・ラヴィルマルケ氏と彼に協力を惜しまない方々の計画と仕事にたいしては、ただ賛同することしかできません。できるだけブルトン語の単語だけを用い、綴り字法に関しては、理性的で確固たる方法に従おうと気遣うわれらが愛すべき協力者たちの配慮は大変なものです。(……)学校の数の増加に伴い、あと数年で、すべてとは言わずとも大部分の人がフランス語

を解するようになるでしょう。しかしそれは彼らが町の住人や上流人士に話しかけるための学問的なことばとなりましょう。彼らの間では、日常会話には相変わらずブルトン語が使われるでしょうし、そこから不純物がことごとく洗い落とされれば、彼らはますますブルトン語に愛着をもつことでしょう。(……)ブルトン語を守ることはこの地方の幸福にとって重要なことです。民衆の言語と彼らの性質、習慣、風俗、信仰などとの間には密接な結びつきがあるからです⁽³⁸⁾。

カンペール司教はすでに土地の神学校にブルトン語の講座を設けることも表明しており、ラヴィルマルケたちの活動に大変好意的であった⁽³⁹⁾。たぶんそのせいであろう、この雑誌の発行地は、この号からサン・ブリウーからカンペールへと移っていた。いずれにせよ、司教の後押しはルゴニーデックの信奉者たちを勇気づけた。とりわけラヴィルマルケの舌鋒は、これを機にますます磨きがかかった。彼は同誌の次号で、当時ブルターニュで使われていた賛美歌集のブルトン語訳を槍玉に挙げ、それを「韻文にフランス語風の破格語法を散りばめて、それがみごとに効果を上げ、自分がすばらしい人物だと思い込んでいる、どこかの田舎教会の用務員の手になるもの」と酷評し、「ことばを台無しにするのは、才気のある人でも無知な人でもなく、ばか者だ⁽⁴⁰⁾」とまで決めつけた。

もちろん、こうした態度が反発を招かないはずはなかった。たとえば、ニゾン近郊のメルグヴェンの司祭であったタルゴン神父 *abbé Talgorn* は、『ルヴュ・ド・ラルモリック・エ・ド・ルエスト』の編集長にこんな手紙を送りつけた。「世に七不思議があるといいますが、この人(ラヴィルマルケ)はそれに八つ目を付け加えようとしているのです。言語を復活させようというのですから。(……)彼が使うWとKはうちの農民たちには何のことやら分かりません。(……)私は最近の貴誌で、ことばを台無しにするのは、才気のある人でも無知な人でもなく、ばか者だ、というごたいそうな文句を読みました。たしかにわれわれ貧しい田舎司祭には学識はございませんが、それでも無知な人より下に置かれるいわれはこ

ございません。ブルトン語で説教して三十五年になりますが、ド・ラヴィルマルケ氏に教わらずともちゃんと自分の言うことを分かってもらっていますよ⁽⁴¹⁾」。

しかし、この反論は神父にとって高くついた。彼はその後ラヴィルマルケにその著書を「俗語混じりの唾棄すべきもの」と酷評され、「プロテスタントの教義が混ざっている⁽⁴²⁾」という嫌疑までかけられることになる。

が、こうしたラヴィルマルケの態度に批判的であったのは、ひとりタルゴロン神父のみではなかった。たとえばブルゴンヴァンの司教であったペロー神父もまた、カンペール司教グラヴァン師の秘書であるアレクサンドル神父の許に、刊行されたばかりの『信心会の手紙』について一文を書き送っていた。神父はそこでラヴィルマルケの才能と知識には敬意を払うと断りながら、次のように書いていた。『手紙』の翻訳は一般には支持されておりません。教育を受けている者でもなければ、農民たちのうちで、この手紙を読んで説明なしに理解することはできないものはいないでしょう。(……) 私はルゴニーデック氏が、ある種の人々が言うほど称賛に値する人物とは思えませんでした。(……) ブルトン語の純粹さを保とうとするラヴィルマルケ氏の努力には敬意を払いますが、過度の純正論に陥らぬように注意してほしいものです⁽⁴³⁾。もつとも、この手紙を受け取ったアレクサンドル神父自身が、自らブルトン語で詩をつくり、それをラヴィルマルケに添削してもらっていたのだから、こうした批判もあまり効果があるものとは言えなかった⁽⁴⁴⁾。のみならず、彼がつくった詩の一篇は、この手紙が書かれる九日前に『ルヴユ・ド・ラルモリック・エ・ド・ルエスト』誌上に掲載され、ラヴィルマルケから「詩的エレガンス、文体の純粹さと正確さの模範⁽⁴⁵⁾」というお墨付きをもらってのものである。しかも、その詩はほかならぬルゴニーデックの改革を擁護したことへの謝辞として、カンペール司教に捧げられたものであった⁽⁴⁶⁾。たしかに運動にたいする反論は多くあった。しかしそれはラヴィルマルケたちに再考を促すほどのものではなかった。それどころか翌一八四五年には、彼らの活動をさらに勢いづけるような出来事が起こる。同年、ルゴニーデックの遺骸が

パリから故郷ルコンケ近郊の墓地へと移送されることになり、合わせて彼の記念碑が建立されることになったのである。除幕式は十月十二日に行われ、ブルターニュ中から多くの人が集まった。ラヴィルマルケは二十日付の『ルヴュ・ド・ラモリツク・エ・ド・ルエスト』に師の業績を讃える長文を献じ、こう言っていた。

十月十二日の儀式に見られた(……)愛国心の例は、世界史上、類のないものである。これまで王や立法者、戦や航海の偉人、歴史家や優れた詩人などが人々から記念碑を捧げられることはあったが、自国の文法学者に記念碑が捧げられることなどなかったからである。なぜブルトン人はかくも輝かしい榮譽をルゴニーデックに与えることにしたのか。それはルゴニーデックが彼らの母語を救ったからである。彼らがこの言語に、あたかもそれが彼らの宗教や道徳性や風俗習慣や伝統や精神や知性(……)、ひとこと言えば(……)、ナシヨナリテを構成するあらゆるものの守護者であるかのように、執着しているからである(47)。

ラヴィルマルケはそこで、ルゴニーデックの綴り字法を「世界でもっとも完璧なもののひとつであり、規則性、判明性、明晰さ、単純さ、望みうるあらゆる美質を備えたもの(48)」と絶賛し、その未来を予想して、「無秩序は打ち破られるだろう。法が気まぐれにとって代るだろう(49)」と楽観的に語った。論考は高らかにこう結ばれていた。

いまやすべてがわれわれに希望する理由を与え、すべてがわれわれを慰め、安心させる。飛躍は全般的である。若い世代は前進する。ナシヨナルな運動は何も止めることができない潮のように満ちる。啓蒙と進歩の行いの知ある推進者たちよ、未来はわれわれのものだ(50)。

むろん、ことはそれほど楽観を許すものではなかった⁽⁵¹⁾。たしかに民衆にたいする聖職者の影響力は小さくはなかった。しかし言葉を変えらるというのは、それとはまた別次元の問題であった。もちろん、ルゴニーデックの信奉者たちにとつて、言語を守ることはブルターニュのナシヨナリテを守ることに等しく、フランス語の侵入は即そのナシヨナリテの侵害を意味するものであった。が、そうした問題は、指導者層の問題ではあっても民衆の問題ではなかった。実際、彼らが生きていたブルトン語の世界は、「純粹さ」や「ナシヨナリテ」とは無縁の日常的世界であった。そしてその世界を支えていたのは、ほかでもない、ラヴィルマルケが『ブルトン語の未来』のなかで蛇蠍の如く嫌った印刷業者たちだったのである。

レダンと『バルザス・ペ・ガナウエヌ・ブレイス』

さて、『バルザス・ブレイス』の出版は、たしかにフランスの内外にブルターニュの民衆歌の存在を広く知らしめるものだった。しかし当然のことながら、当のブルターニュでは民衆歌はなんら特別なものではなかった。そのうえ、紙に印刷された歌というものもまた、ここではきわめて日常的な光景だったのである。

実際、当時のブルターニュには、民衆の間に歌の刷り物が大量に出回っていた⁽⁵²⁾。そうした歌の内容はさまざまであったが、大方が『バルザス・ブレイス』でも採用されていた伝統的な三区、すなわち「歴史的な歌」、「愛の歌」、「宗教歌」のいずれかに分類されるもので、なかでも多かったのが「歴史的な歌」であった。その意味で、ブルターニュにおける歌の役割は、ラヴィルマルケが『バルザス・ブレイス』の「序文」で語った時代とほとんど変わってはいなかったと言っている。そこでは、相変わらず歌は民衆に出来事を伝えるための重要な通信手段のひとつだったのである。

そうした歌の大半は、誰でも知っている伝統的なメロディーにのせて歌われる、いわゆる替え歌であったが、なかには楽譜が記載されているものもあつた。印刷の体裁は一樣ではなく、一枚刷りのものもあれば数ページにまたがるものもあつた。歌の作者には聖職者や教師から石工や仕立屋までさまざまな職業の人が名を連ねていたが、それで生計を立てているプロもわずかながらいた。こうした歌は縁日やパルドン祭のときなど、人の集まる場所で行商人によって売られていたが、彼らはまたたいていが歌の名手でもあり、自ら歌い方の模範を示しながら売り歩いたという。

十九世紀前半のブルターニュには、この種の歌を印刷する業者は数多くあつた。しかし、なかでもっとも精力的に活動したのは、なんといってもモルレーのアレクサンドル・ルイ・マリー・レダン Alexandre-Louis-Marie Lédan であつた。しかもレダンは、歌を印刷するばかりではなく、自ら歌をつくり翻訳もする才人でもあつた⁽⁵³⁾。実際、ナポレオンの崇拜者でもあつた彼は、百日天下のときに、きわめて挑発的かつ危険な歌を村々に広めたとして官憲から睨まれもしていた。ともかく、それがジャンヌダルクであれ、どこかの町の火事であれ、遠くマルチニックで起こつた地震であれ、レダンは歌で取り上げない話題はなかつた。その証拠に、先に触れたルゴニーデックの記念碑の建立も、彼によって歌にされたのである⁽⁵⁴⁾。一方、彼はまた一八一五年、すなわち『バルザズ・ブレイス』が出版される二十五年も前から歌の収集にも手をつけており、暇を見つけては近隣の村々を歩き回っていた。ひとこと言えば、レダンはこの地方の代表的な文化人だったのであり、ミシュレやジョン・ブラウニングなどの著名人もブルターニュを旅行した際には彼のもとを訪ねていたのである⁽⁵⁵⁾。

ところで、レダンの店の顧客はもっぱら近隣の農民であり、彼らは歌のみならずさまざまな印刷物を手に入れるためにその店にやって来た。たとえば、一八二九年に彼のもとを訪れたトーマス・プライス師は、店を訪れる客の多さに率直に驚きの声を上げ、「農民や庶民のみによつて経営を支えられている印刷業者など、フランスのほかの地域にはない⁽⁵⁶⁾」と

感想を記していた。

この種の印刷物が民衆にたいしてもつ影響力には無視できないものがあつた。たとえば、コート・デュ・ノール県の知事はすでに一八一一年に次のように書いている。

たわいもない刷り物が次から次へと夥しく印刷されています。民話や逸話や歌や予言や哀歌を集めたものであつたり、最近の出来事を述べたりしたものです。大方が取るに足らないもので、真面目に受け取るに値するものではありませんが、町や村の民衆の心に直接訴えかけるものであり、人々の意見や臆断は多少なりともそれによつて左右されています。ある種の有害な考え方が広く行きわたり、驚かされることがありますが、それはこうした印刷物の普及によるものなのです⁽⁵⁷⁾。

こうした刷り物が広く民衆に与える影響は、ときに権力者に不安を覚えさせるほどのものだったのである。そして、それは先に見たように、ブルトン語純化運動の推進者たちにとつても同じであつた。というのも、民衆にとつて彼らの印刷物こそがブルトン語に関する知識の源であり、しかもそれは著しくフランス語化されたものだからである。それがルゴニーデックの改革にたいしてどれほど大きな阻害要因であるかは、先述した通りであつた。実際、ラヴィルマルケは彼らを「われわれの貞潔な言語を汚すことに野卑な喜びを覚える、あの底意地の悪い雑種の印刷業者⁽⁵⁸⁾」と呼び、その印刷物を「フランス人とブルトン人の血が混ざつた印刷業者の作者の金儲け主義が生みだした雑種、批判するのも憚られる変妙な混成語ででっちあげられた唾棄すべき散文⁽⁵⁹⁾」と慢罵していた。なかでもレダンにたいしては、一八四一年に親友のブリズーが自分の作品の一部を剽窃したとして彼を訴える事件を起こしていただけに、とりわけ強い嫌悪感を抱いていた。

もつとも、ラヴィルマルケはただ批判ばかりしていたわけではなかった。彼はまた自ら模範をしめすべく、そうした印刷業者の市場に乗り込んでいきもしたのである。一八四五年頃、彼はアンリ神父とともに『バルザス・ペ・ガノウエヌ・ブレイス』（『バルザス、あるいはブルターニュの歌』）*Barzaz pe Ganaouennou Breiz*と題する三篇の歌を収めた小冊子を編集し、それを歌の行商人の手に渡す。ラヴィルマルケは言う。

私は自費で民衆のために故郷の歌を印刷させる。それも、ぼろ紙の上に使い古した活字で粗悪なインクを使って印刷するのではない。逆に、真っ白な紙の上に真新しい活字で良質なインクを使って、当代随一の印刷業者によってパリで印刷するのである⁽⁶⁰⁾。

言葉だけではない。そこでは紙やインクまでが「本物」でなければならなかったのである。もつとも、編者の意気込みとは裏腹に、この歌集の売れ行きは芳しいものではなかった。宗教歌を中心とした真面目すぎる内容も一因だったろうが、ルゴニーデックの方法によるその馴染みのない言語のせいも大きかったのだろう。いずれにせよ、パリや外国では評判となったラヴィルマルケも、当のブルターニュではなんら民衆から支持を得られる存在ではなかったのである。

とすれば、ここで翻って問わねばならない。では、それならば、ラヴィルマルケにとって「民衆」とはいったい誰だったのか、と。彼はたしかに『バルザス・ブレイス』の歌を民衆から採集したと言いはした。しかし、その歌と民衆が好む印刷物とのあいだにそれほど隔たりがあるとするれば、ではその民衆とはいったい誰だったのか。少なくともそれはレダンの印刷物を読むような人々であつたはずはない。では民衆的な出版社もあずかり知らぬその民衆とは、いったいどのような人々だったのか。

註

- (1) Charles Le Goffic, *L'âme bretonne, deuxième série*, Editions Honoré Champion, 1912, réimpression, 1976, pp.52-54.
- (2) *Ibid.*, p.52.
- (3) *Ibid.*, p.56.
- (4) ただし、しばしば誤解されることだが、翻訳されたのは『バルザズ・ブレイス』の一部であって、全部ではない。cf. Francis Gourvil, *Theodore-Claude-Henri Hersart de la Villemarqué et le «Barzaz-Breiz»*, Oberthur, 1960, p.81.
- (5) Théodore Hersart de La Villemarqué, *Barzaz-Breiz, Chants populaires de la Bretagne*, Charpentier, 1839, i-ii
- (6) *Ibid.*, ij.
- (7) *Ibid.*, Iij-iv.
- (8) *Ibid.*, iv.
- (9) *Ibid.*, xxijj-xxiv.
- (10) *Ibid.*, xxiv-xxvi.
- (11) *Ibid.*, Ixvij-Ixvijj.
- (12) この写本をめぐって、ラヴィルマルケは作家のメリメとの間である事件を起こしていた(拙論『ブルターニュにおけるナシヨナリズムの誕生(三)』、鹿児島大学法文学部紀要「人文学科論集」第56号、八二頁―八五頁を参照)。ブルターニュの地方紙『エルミュー』が、ラヴィルマルケが見つけたグエンフランの写本をメリメが横取りしたと報じたのがこのきっかけだったが、著者はこの「序文」で、このとき発見されたのは聖ナンの写本であってグエンフランの写本ではなかったと告白している(*Ibid.*, xi)。
- (13) *Ibid.*, xiv.
- (14) *Ibid.*, p.1.

- (15) *Ibid.*, pp.3-5.
- (16) *Ibid.*, p.10.
- (17) *Ibid.*, p.121.
- (18) F. Gourvil, *op.cit.*, p.78.
- (19) B. Tanguy, *op.cit.*, pp.97-98.
- (20) F. Gourvil, *op.cit.*, p.83.
- (21) こうした声は、『バルザズ・ブレイス』が「フランス語フランス文学歴史委員会」で審査されていた頃からすでであった。たとえば一八三八年四月七日の議事録は、シャルル・ノディエ Charles Nodier の意見として次のように伝えている。「ノディエ氏は、問題の本質的な点、すなわち歌が本物であるかどうかを確認するのは、不可能とは言わぬまでもきわめて困難であると指摘し、もし委員会が新たなマクファーンソンの詐欺行為にお墨付きを与えることになれば、きわめて遺憾なことになろうと言っている」(F. Gourvil, *op.cit.*, p.63)。またミオルセック・ド・ケルダネ Miorcec de Kerdanet も、歌集の出版後、次のように書いていた。「内容は古いかもしれないが、形式はまったく現代的だ。身体は老いているかもしれないが、着物は新しい。実際、今日誰が古ブルトン語を分るだろうか」(*Ibid.*, p.84)。
- (22) F. Gourvil, *op.cit.*, p.78.
- (23) *Ibid.*, p.75.
- (24) *Ibid.*, p.77.
- (25) T. H. de La Villemarqué, *L'Avenir de la Langue Bretonne*, Edition du Terroir breton, 1904, p. 9.
- (26) *Ibid.*, pp.16-20.
- (27) *Ibid.*, p.20.
- (28) *Ibid.*, p.22. そこにはまた、「こんな言葉もある。『台所のラテン語』と言うように、人は『司祭のブルトン語』という」。
- (29) *Ibid.*, p.23
- (30) この時代のブルターニュにおけるフランス語教育については、原聖『周縁的文化の変貌』、一一五頁―一三〇頁を参照。

- (31) T. H. de La Villemarqué, *L'Avenir...*, P.25.
- (32) *Ibid.*, p.29.
- (33) *Ibid.*, p.30.
- (34) *Ibid.*, p.34.
- (35) *Ibid.*, p.37
- (36) *Ibid.*, p.32.
- (37) アンリ神父が一八三九年に出版した『聖イジドールの生涯』 *Buez saint a Guemper* には、まだ旧来の綴り字法が使われていたから、神父とラヴィルマルケの出会いには少なくともそれ以後のことであったと考えていいだろう。
- (38) Pierre de la Villemarqué, *La Villemarqué, sa Vie et ses Œuvres*, Champion, 1926, pp.114-115; B. Tanguy, *op.cit.*, pp.152-153.
- (39) T. H. de La Villemarqué, *L'Avenir...*, p.31.
- (40) F. Gourvil, *op.cit.*, p.101; B. Tanguy, *op.cit.*, p. 155
- (41) *Ibid.*,p.100; *Ibid.*,pp.155-156.
- (42) B. Tanguy, *op.cit.*, p.156.
- (43) F. Gourvil, *op.cit.*, p.101; B. Tanguy, *op.cit.*, pp.158-159.
- (44) F. Gourvilは、アレクサンドル神父の詩とラヴィルマルケによるその添削の一例を紹介している (*Ibid.*, p.131)。
- (45) B. Tanguy, *op.cit.*, p.159.
- (46) *Ibid.*
- (47) F. Gourvil, *op.cit.*, p.135.
- (48) B. Tanguy, *op.cit.*, p.173.
- (49) *Ibid.*
- (50) F. Gourvil, *op.cit.*, p.135.
- (51) たとえば、同じ年の十二月に同誌に掲載された無記名の記事は依然として困難は変わらないことを告げていた。「幾人かの司祭は、

使い慣れた言葉にもたらされる改革から必ず帰結する面倒を恐れているように思える。彼らは強情で年老いた信者たちの根拠薄弱な批判に、少々耳を傾けすぎるくらいがある」(B. Tanguy, *op.cit.*, p.177)。

(52) この種の印刷物の詳細については、Daniel Guiraudon, *Chansons populaires de Basse-Bretagne sur feuilles volantes*, Skol Vreizh, 1985, pp.19-24.

(53) F. Gourvil, *op.cit.*, p.21.

(54) B. Tanguy, *op.cit.*, p.170.

(55) ミシュレのレダンについての記述は、Jules Michelet, *Carnet de Bretagne, Terre de Brume Editions*, 1997, pp.27-28を参照。なお、ラヴィルマルケもまた一八三六年七月にレダンのもとを訪れ、二つの歌のテキストを入手している。しかし、そのどちらも『バルザス・ブレイス』には収録されなかった(D. Guiraudon, *op.cit.*, p.24)。

(56) D. Guiraudon, *op.cit.*, p.22.

(57) *Ibid.*, p.35.

(58) *Ibid.*

(59) *Ibid.*, p.24

(60) *Ibid.*, p.44.